



器具によるアジャストメント ②

1960年代後半、ドクター・リーとドクター・ファーは拇指ターゲル・アジャストメントに代わる矯正器具の開発にあたって、様々な器具を

ンマーが鉄床を叩くことによる振動刺激の動的エネルギーがアジャストメントの重要な要素になります。

発に求めました。最終的に親知らずを割裂するために使う手術用の器具がアクティベータ器Ⅰの原型となりました。アクティベータ器Ⅰは、筒の中でバネ仕掛けの装置によってハンマーで鉄床を叩きつける仕組みになっています。ハ

さまざまな試作品を改良し続けて、1976年にアクティベータ器Ⅰが初めて米国内で大量生産されました。そして、1978年9月26日にはアクティベータ器の特許を取得し、FDA(米国食品医薬品局)に登録されました。この初代のアクティベータ器Ⅰ

は、その後、16年間標準的に使われ続けました。ちなみに筆者もパーマー大学留学中に、選択科目としてアクティベータ・メソッド(以下、AM)を履修し、アクティベータ器Ⅰを使用していた経験があります。当時の私は、手によるアジャストメントにこだわりがあり、サブラクセーションを特定する方法論としてAMに興味がありました。しかし、器具によるアジャストメントにはほとんど興味がありませんでした。そんな私が、今では日本にAMを啓蒙する代表者になるとは：今思うと固定観念が強かったと振り返ることができます。

当時、背骨をボキボキ鳴らすアジャストメントがカイロプラクティックの代名詞かのように受け止められた時代に実際にどれだけ骨が動いたかの研究はほとんどされていま

せんでした。ドクター・ファーは、その研究を1985年に国からの助成金を得てセントルイス大学の医科大学院で行いました。犬を使った動物実験では、犬の背骨に針金を刺しその背骨にアクティベータ器Ⅰでアジャストメントを行いました。実験結果は、犬の棘突起が最大で1.3mm移動し、矯正して1000分の19秒後に、わずか1mmの平行移動と0.5度の回旋が生じた」と報告されています。その後、1994年に海外での人体に對する実験も行われ、アクティベータ器のアジャストメントで背骨が0.3〜1.6mm動いたという報告もあります。骨がどれだけ動いたかの研究も大切ですが、さらに、骨を効率的に最小限の力で動かすには何が必要なのか、のちの研究で明らかになってきます。